

令和7年度(2025年度) 島根県立大学入試対策 類題演習

国際関係学部 国際関係学科 国際関係コース

模擬試験：移動する境界線と市民権

【解答時間 90分】

- 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

近代国家の形成過程において、国境とは主権が及ぶ範囲を画定する物理的な「外枠」であった。しかし、国家がその内部に住む人々を「国民」と「外国人」に厳格に差異化しようとする時、境界線は地図の上から人々の「身分」や「記録」の中へと移動を始める。その象徴的な装置が、日本における戸籍制度である。

戦時中、朝鮮や台湾の人々は日本国籍を有する「臣民」として動員されたが、その身分は「外地戸籍」によって内地人とは明確に区別されていた。そして日本の敗戦後、かつての臣民たちは講和条約の発効とともに、通達一つで日本国籍を喪失した。ここで用いられた基準こそが戸籍であり、(a)国籍と戸籍の密接な関係が「日本人」という概念の排他性を形成する一因となったのである。

高坂正堯の視点を借りれば、国家とは「力の体系」「利益の体系」であると同時に、共通の行動様式や価値観に基づく「価値の体系」である。戸籍や国籍は、単なる行政上の管理(力)や社会保障の配分(利益)の基準であるだけでなく、誰を「身内」と見なし、誰を「他者」と見なすかという「価値の境界線」を、我々の無意識の中に引き続けてきた。その結果、「日本は島国であり、移民を受け入れてきた歴史がない」という、事実とは異なる(b)「日本人」の自画像が社会に根深く定着することとなつた。

(中略)

自画像を描く行為とは、鏡に映る自分を外から眺めるだけでなく、内なる「他者」との対話を通じて自己を再構築することに他ならない。境界線が物理的な国境から、制度や意識の層へと移動し、重層化している現代において、市民権のあり方を問うことは、我々自身の輪郭を描き直す知的労働そのものなのである。

問1 下線部(a)について、なぜ「戸籍」が日本国民概念の「排他性」を形成することになったのか。文章中の語句を用いて、180字以内で説明しなさい。

問2 下線部(b)について、筆者が述べる「日本人」の自画像とはどのようなものか。また、それはなぜ形成されたと考えられるか。200字以内で説明しなさい。

問3 現代において「日本人」の自画像を再構築するためには、どのような視点が必要だと考えるか。本文の内容やこれまでの学習をふまえ、具体的な事例を一つ挙げながら、あなた自身の考えを600字以内で述べなさい。